

# 第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (14)

—— А.И. Черепанов : Записки Военного Советника  
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀\*

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First  
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (14)

Yoshinori TAKIMOTO

## Abstract

The commander of the 4th Corps was following orders from the National Revolutionary Government, the commander-in chief and the leaders of advisers in putting off the offensive.

The city of Pingjiang was Wu Peifu's major stronghold forming a bridgehead beyond the Miluo River. The situation required that the 4th Corps rapidly capture Pingjiang and push through the mountain passes on the boundary of the Hupei province before Wu Peifu's troops came up. Continuing the offensive, the 4th Corps met with desperate resistance on the part of the enemy.

Wuchang could be taken by establishing a blockade, cutting off all supply line and tunnelling under the wall to blow it up. Meanwhile, military operation had broadened in the north. The National Revolutionary Army had liberated an enormous area, with millions of people joining the revolutionary camp.

After Wu Peifu was defeated and National Revolutionary Army reached the Yangzi, Sun Chuanfan was the only serious enemy of the revolutionary armed forces in Central China.

On 5 November Nanchang was surrounded. The final defeat was inflicted on Sun's armies and Jiangxi troops. Pushed away from the railway and surrounded from the south and north, the surviving troops were at last disarmed on 9 November.

1926年に始まった北伐は先ず、湖南省で戦闘が始まった。国民革命軍側についた唐生智がその地ですでに、ある程度勢力を得ていたが、呉佩孚側の反撃によって、彼は敗退した。しかし、北伐が本格的に始まると、北伐軍の力は大きく、すぐに長沙を取り返した。

8月15日、蒋介石とブリュヘルが長沙に到着し、最高会議がもたれ、武漢攻撃の命令が発せられた。

平江市は呉佩孚の主要な基地であり、第4軍としては至急ここを占拠し、呉佩孚の援軍が来る前に、山を越えて湖北省境に進出することが重要であった。

国民革命軍は敵の絶望的な抵抗を排して攻撃を続行し、封鎖を行い、敵の補給路を断ち、城壁の下にトンネルを掘ってそれを爆破し、ついに武昌を占拠することができた。このようにして、華中における最強の城壁都市が陥落した。

一方、福建省側でも戦闘が始まり、北伐軍は北方に向かって急速に前進した。かくて、軍事作戦は北方で展開され、国民革命軍は革命陣営に参加する何百万もの民衆と広大な地域を解放した。

呉佩孚が敗北し、国民革命軍が長江に進出した後、孫伝芳が華中における革命軍勢力の唯一重大な敵となった。彼は国民革命軍の脅威をすでに熟知していた。一方、国民革命軍側も孫伝芳が呉佩孚よりもはるかに

1993年9月25日受理

\* 一般科

強力であり、相手として極めて手強いことを知っていた。

江西の作戦で、蔣介石はブリュヘルに相談することなく独自に作戦を開始したが、逆に優勢な敵軍、特に、九江―南昌間の鉄道を利用して軍隊を自由に移動することのできる孫伝芳軍によって、各個撃破されてしまった。

ブリュヘルは鉄道線路の遮断に全力を尽し、これに成功した。その結果、敵軍は孤立した。かくて、11月5日に南昌は包囲され、8日には降伏した。鉄道線路と湖の間にあって南北から包囲された敵の残存部隊も11月9日に武装解除された。

以下はこの作戦の軍事顧問А.И.Черепановの回想録〈Записки Военного Советника в Китае〉1976 НАУКАの458頁～501頁の全訳である。

当時、唐生智は《ゆるぎなき左派国民党員》と考えられていた。そして広州政府の政策は概して、彼の立場を強化することに向けられた。

だが、唐生智の方は自分の評判を高めることに努め、同時に、自分の軍隊の重大な損失を少しでも避けようとして、他人を利用することに努めた。8月22日か23日、彼は部下の指揮官達の集まりで長口舌をふるった：《我々はすでに湖南省を確保した。我々は国民政府の援助なしでそれを成し遂げた。それどころか、我々は国民政府を助けて、その軍隊を湖北省の省境まで導いた。今や、我々はこれ以上戦うことはできない。我々は部隊を集結し、休息させ、今後何をすべきかを考えよう》。

唐生智はこのような立場をすぐにとったわけではなく、国民革命軍の司令部が自分を武漢へ一番乗りさせないよう強力に努めていることを知った時はじめて、彼はそうしたと言わねばならない。

彼は副官を醴陵へ派遣し、話し合いのため、第4軍軍長及び参謀長に長沙へ来るよう要請した。そこで、唐生智の第8軍の代表と第4軍の代表との間で、今後の進撃のテンポに関する問題で論争が起こった。

長沙を占領した後武漢攻撃を開始するまでの一カ月間、第4軍の代表者が次々と長沙へやって来たのは要するに、以後の攻撃を延期するためであると言ってよいであろう。

唐は卑劣な手段にも訴えた（これは一般的に軍閥の政治的陰謀には付きものである）。彼は第4軍の司令部に次のような電報を送った。第4軍を含めた全師団長が要求しているのに、第4軍は北方へ進撃するように。同時にまた、彼は平江攻撃に関してしかるべき命令を

送った。それに対する返事として、《他人》の兵団の師団に命令する権限は彼には無いという、厳しい調子の電報を彼は受け取った。

第4軍長は国民革命政府、総司令官及び顧問の指導者達の指示にしたがって、攻撃の時期を遅らせた。西部戦区の軍隊の側面と後方の安全を確保していなかったのも、北方へ進撃することは不可能であった。国民革命軍第2、第3、第6軍が到達してはじめて、これは可能であった。国民革命軍の主力が到達しない状況でこの作戦が成功した場合、唐生智は完全にのぼせあがったであろう；彼は手に負えなくなったであろう。

顧問達の中には、揚子江に向かって強行前進を行うことは革命の利益にかなうものではなく、また唐生智が武漢で支配者になった場合、よくある普通の軍閥に変わるだろう、と考えた者もいた。カラハンもまた、岳陽を奪取した後そこに止まり、全軍を長沙に集結させて強化し、湖北に進撃せずその無血占領を行う必要があると考えた；このためには、地方軍閥達を分裂させ、孫伝芳及び楊森両者と話をつけることがぜひ必要であった。

8月19日迄に、西部戦区の兵団、第4軍（兵員9千）、第7軍（兵員1万）、第8軍（兵員1万3千）は汨羅江（汨水）の南岸に進出した。第4軍の南に第6軍（兵員8千）が進出して来た。蔣介石の第1、第2師団は総司令官の予備軍として長沙に待機しており、第9、第10軍は常德——臨澧地区に配置されていた。

中央戦区の兵団は次のように集結した：第2軍は澧陵、第3軍はSi Zheng。

西部戦区の部隊に対峙しているのは、長沙攻撃の戦闘ですでに敗残状態にある葉開鑫の旧部隊と湖北の2個旅団、総計2万～3万の兵員であった。呉佩孚は自分の河川艦隊から15隻の砲艦を岳陽に集結した。

8月15日、蔣介石は顧問団長ブリュヘルに伴われて長沙に到着した。そしてその翌日、国民革命軍最高司令部の会議が持たれ、8月18日に武漢進攻の命令が出された。

作戦はブリュヘルによって作成されたものであった。それは国民革命軍の作戦行動で二つの段階を想定していた。第一段階では、右翼が敵の北方への退路を絶ち、それを洞庭湖まで追いつめ、武装を解除するための攻撃を実行する必要がある。第二段階では、呉佩孚が送って来るとされる予備軍を遭遇戦で撃破することであった。

このために、平江地区の軍閥を撃破した後、強行軍

によって汀泗橋で鉄路を切断する命令が第4軍に発せられた。第7軍は北西戦区に進撃し、敵の北方への退路を遮断し、敵を洞庭湖まで追いつめ、第8軍と協力して敵を武装解除することになっていた。作戦の開始にあたって第8軍に次の任務が課せられた：敵を釘付けにし、第7軍が洞庭湖に進出するのを助け、敵が壊滅した後、岳陽に移動する。第6軍の受けた命令は、梯形編成で第4軍の後に続いて前進し、西部戦区の部隊の側面及び後方を確保し、孫伝芳が攻勢に転じた場合にはいつでも第4軍を応援する準備をしておくことであつた。

第9及び第10軍は湖南省の北西部を守るよう命令された。第2軍及び第3軍は西部戦区の部隊の後方を確保し、広東省の北部を予想される孫伝芳軍の侵入から守っていた。武漢への進出路は汀泗橋と咸寧の北方にある沼沢地のために、一層困難なものになっていた。最善の方法は鉄路に沿って接近することしかなかった。

ブリュヘルの全体計画には、戦略と政治的局面に対する極めて思慮深い洞察とがその内部で結びついていた。汀泗橋の重要拠点に進撃することになっていたのは、当時広州政府の主要な支柱であり、《保定派》とも蒋介石とも深く関わっていない第4軍そのものであった。《保定派》がこの計画を審議する際、少しも喜ばなかったのは当然である。彼らは自分達が最初に汀泗橋に行く鉄路に出、それに沿って武漢攻撃——多くの沼沢を縫って——のための最善の進路を手に入れたと思っていた。このために、第4軍が第7軍のために場所をあけて、東へ移動することを彼らは提案した。彼らは司令部の強硬な態度にぶつかった時、形式的に同意したけれども、我々が後に解るように、何でも勝手にやろうとした。

《保定派》の主要な影響力はこの頃までに大いに膨張していた。第8軍は長沙攻撃の過程及び長沙占拠後に、捕虜のせいで急速に拡大した。今や第8軍は28個連隊、即ち10個師団になった。まさに同じことは李宗仁の第7広西軍についても言うことができる。

第4軍もまた複雑な構成であつた：その中には陳銘枢の第10師団があり、それを《保定派》が指揮していた。また当時、《左派》国民党員に比較的近い態度をとっていた張発奎の第12師団もあった。第2, 3, 6軍について言えば、彼らは唐生智を強力になりつつあるライバルと見て、概して彼に反対の気分であつた。だが、総司令の蒋介石にもあまり好感を抱いていなかった。何

故なら、彼が彼らに対する財政援助をひどく削減したからであつた。

平江市は呉佩孚の極めて重要な拠点で、汨羅江の対岸にある橋頭堡であつた。それを守っていたのは4~6千の敵軍であつた。状況からして、第4軍はただちに平江を占拠し、呉佩孚軍が到達する以前に湖北省の省境にある峠を急いで通り過ぎる必要があつた。

作戦計画を作成したのは第4軍の顧問 Горов であつた。その作戦思想は、8月19日に第4軍の右翼によって平江を攻撃することにあつた。その際、第10師団が主要な攻撃力を行使することになっており、葉挺の独立連隊は汨羅江の南岸で、橋頭堡にいる敵軍を釘付けにすることになっていた。

第10師団は汨羅江の北岸を守っている軍閥軍の2個大隊と、3時間以上忙しく応戦した。その間、葉挺の連隊は正確にその任務を果たした。即ち、敵をしっかりと釘付けにした。(連隊の強化のために2個大隊が追加された)。その後、葉挺は敵の橋頭堡に小部隊を対峙させ、一方、主力を平江の東側で渡河させ、北から市に回り込んで团山地区に前進した。第10師団のすでに到着していた部隊と西から平江に回り込んでいた36連隊と協力して、葉挺の主力は敵を包囲し、6,000人以上の兵員を捕虜にした。汨羅江上の成功は第12師団長張発奎と連隊長葉挺の作戦の妙と積極性によって達成された。

攻撃を続けている最中、第4軍は敵の死にもの狂いの抵抗に出会った。この時、第7軍は北西に進撃する代りに、第4軍よりも先に汀泗橋を占拠しようとして、道なき道を通り Jiuchuan 山脈の支脈を越えて徐々に北へ進撃した。江西省では、孫伝芳が不審な軍の移動を行つた。それ故、第6軍もこの行動に対応せざるを得なくなり、支援することができなくなった。8月26日、第4軍は単独で汀泗橋付近で戦つた。

度重なる銃剣突撃はひどい損害をもたらした。例えば、第12師団のある大隊では全体の50%が戦列から離れた。だが、勝利もまた見事なものであつた。汀泗橋で1万~1万1千の敵兵(9~11連隊)が戦つたが、うまく退却できたのはその3分の1にすぎず、然もそれは無秩序の状態であつた。2千以上の兵士が四散したか、あるいは湖に溺れた。第4軍は4千丁のライフル及びその他の戦利品を手に入れた。国民革命軍の2個連隊(その中に葉挺の独立連隊を含む)が呉佩孚軍を追撃し、咸寧市を占拠した。

戦闘の指導において疑いもなく見事な役割を果た

のは Гореv であった。彼は自分の報告書の中で次のように述べた：《最初、敵は陣地から陣地へ組織を保って撤退していた。しかし、独立連隊が急襲した時、撤退は敗走に変わった。独立連隊が8時頃鉄道線路の所に出た時、逃げる余裕がなかった連中はすべて我々の側に留まった》。Гореv は当地の条件下でよくある作戦上の弱点、即ち、通信が完全に欠陥していること、またそれ故に軍を常時管理することが不可能であることも認めた。

軍の間に、いずれが武漢に一番乗りするかという、一種の競争が生じた。その結果、第7軍と第8軍は利益よりもむしろ害をもたらした。《保定派》は他の軍よりも早く汀泗橋の地点で鉄道線路に到達するために、全力を尽した。それ故、第7軍は予定されたルートを厳守する代りに、第4軍の攻撃地域に向かった。これは真夜中に起こった。同士打ちが生じなかったのは全くの偶然であった。第8軍は敵を釘付けにすることになっていた。だがその代りに、第8軍は汀泗橋に一番乗りすることを望み、予定より早く攻撃に移った。その結果、敵を包囲する代りに、敵に対し準備されていた袋から敵を追い出してしまった。

結局、呉佩孚は第4軍と汀泗橋で激しい戦闘を交えた。近くにいた第8軍のある連隊は第4軍司令部の指令を実行しなかった。それどころか、勝利が得られると、誰よりも早く戦利品のライフル銃を急いで拾い集め始めた。第4軍では次の決定がなされた：威寧を占拠する際、もしこの連隊が命令に従うことを拒否したなら、これを武装解除すること。威寧が占拠された後やっと、第4軍の所へ他の部隊がやって来た：第7軍、第8軍の若干の部隊、そして蔣介石の第2師団。

8月22日、第4軍はバラバラになった敵軍を追って、正に湖北省の都市である通城を占拠した。岳陽を占拠した後、すでに述べた呉佩孚の砲艦に全く戦意が見られなかったので、第8軍第2師団は中国の偉大な河揚子江をチンコウ地点で強行渡河し、更に北上し、漢口の少し北で漢口と北京を結んでいる鉄道を切断しようとした。

その間、張作霖は南口の防備を固めた山路を占拠し、華北で馮玉祥の国民軍に全く思いがけず重大な敗北をもたらした。呉佩孚はこれを利用して、国民革命軍の武漢への進路を遮断することに決め、賀勝橋地区の戦線に到達した。

威寧—武昌（武漢三鎮の一つ）間は長沙からの全進路の中で、防御側に最も有利な場所であった。ここで

は、進路は湖と湖の間を1kmから5kmの巾の回廊に沿って伸びており、しかも、その最も狭い場所は武昌の近くにあり、その上、湖はとても増水していたので呉佩孚の砲艦は自由にそこへやって来ることができた。

国民革命軍の各軍の作戦行動が協調を欠いていたので、軍閥達は敗北した後、自己の部隊の秩序を回復し、極めて素晴らしい陣地で防御を固めることができた。最初、呉佩孚は当地に3個連隊と1個混成旅団を集結させたが、予備部隊の到達が予想された。

この事すべてが敵を勇気づけた。8月29日、国民革命軍司令部は呉佩孚の連隊の一つが反撃に移ったという、今まで聞いたことのない情報を得た。これは軍閥が攻撃的主導権を握った最初のケースであった。

威寧の將校会議で作戦計画が作成された。第4軍は鉄道線路に沿って敵軍を突破することが決定された。第7軍はその右側を進み、更にその師団の一つが東から武昌市へ到達するために、武昌郡の方へ迂回行動をとることになっていた。第4軍は増援部隊として、蔣介石の第2師団とソビエトの大砲2門を受領した。かくて、撃滅された呉佩孚を包囲する任務は敵の側面に攻撃を加える第7軍に課せられた。第9及び第10軍には沙市を攻撃することが命令された。

ソ連の顧問の指導の下で、賀勝橋の浅瀬の所にある保塁を突破する作戦が立てられた。第4軍の3個師団が次々と戦闘に赴くことになった。前衛師団が疲労するまで敵を追撃し、続いて、次の師団が前衛師団の地点を通り抜けて前進し、戦闘を継続することになった。その後も同様である。大砲が第4軍の参謀長を長とする攻撃部隊に集められ、前衛師団に与えられた。

8月29日、第12師団第35連隊は夜中に沼沢地帯の対岸に陣地を築き、それによって攻撃のための出撃前進基地を確保した。だが、そこは敵が側面攻撃を行うためのすばらしい位置であった。戦闘が一晩中続き、連隊はひどい損害を受けた。

8月30日午前5時、第12師団全体が戦闘状態に入った。鉄道線路に沿って決定的な突破を行ったのは葉挺の独立連隊と、それを助けるために投入された、駆け足でやって来た第10師団の1個連隊であった。10時までには、陣地全体が突破された。それは奥行3kmで、三層から成り、それぞれいくつかの塹壕を備えていた。

第12師団は戦闘の主要な困難な任務を遂行し、多大な損害(500人にも上る)をこうむり、賀勝橋に到達し



た。追撃を行ったのは第10師団で、それには国民革命軍政治指導部の顧問 Теруни が加わっていた。師団は予想された抵抗には出会わなかったが、行動は不活発であった。第7軍は第4軍の主力より一日遅れてやっと賀勝橋に到達し、敵軍を包囲するという自己の任務を遂行できなかった。

Горев の評価によると、作戦上の主要な弱点は又もや本物の偵察が実行されなかったことである。まさにこの理由で、第12師団第35連隊は思いがけず極めて不利な立場に立った。呉佩孚軍は、これ程有利な防御線を国民革命軍に突破された場合、武漢三鎮のある湖北省を必ずや失うであろうということに恐らく気がついていたので、呉軍は粘り強く防戦した。

次のような新しい方法がとられた：敵は線路に沿って蒸気機関車を戦場へまっすぐ乗り込ませ、それに搭載された機関銃から砲火を浴びせた。激怒した呉佩孚元帥は自分の将校達の数人の首を手ずから斬ったが、状況を救う助けにはならなかった。彼自身、国民革命軍がやって来るわずか半時間前に、自分の専用列車でかろうじて、こっそり逃げる事ができた。その際、退却していく自分の軍隊の無数の兵士達を列車でひき殺した。

占拠した司令部で発見された命令書から、敵が自軍の予備部隊のやって来るまで、この湖の回廊で長時間持ちこたえられると予想していたのは明らかであった。この事は捕獲された莫大な量の武器や貯蔵食糧によっても明らかであった。特に後者からは、賀勝橋の防衛部隊に対する増援部隊になるはずの部隊がどれくらいの規模であるかを判断することができた。

賀勝橋をめぐる素晴らしい勝利を得た後、国民革命軍の部隊がそのまま攻撃を続けたならば、武昌を完全に占拠できたであろう。この事は疑う余地もなかったことが後に明らかになった。8月31日の夜、第4軍が紙坊にいた時、次の指令が出された：第10師団は混乱に陥って敗走している敵軍を追尾して武昌に突入すること。一方、第12師団は暗闇とひどい悪天候のせいで立ち止っていた。

第10師団長陳銘枢は自分の任務を果せなかった。彼は予想できた危険を恐れて、顧問 Терни の強硬な抗議にも拘わらず引き返した。後に我々が知ったことだが、敵は武昌の陥落が間違いないものと確信したので、夜中ではあったが自分の軍隊を町から撤退させた。しかし、その後またそれを元に戻した。

明け方近くになってようやく第12師団がやって来

た。そして第2師団も続いて来たが、時すでに遅かった。第10師団長が狼狽し、また機敏でなかったのが、国民革命軍は武昌の城壁を包囲攻撃するために40日間止まらざるを得ず、さらに1,300~1,500名もの犠牲者を出した。

他の部隊が集結するとすぐに、城壁で囲まれた武昌を強襲することが決定された。次のような計画が作成された：主要な攻撃は東方から第10師団が行った。第7軍及び第2師団は比較的重要でない任務を果たした：両者は敵軍を自分の方へ引き寄せるために、主要な攻撃の30分前に攻撃を始めることになっていた。全砲兵隊が第10師団の指揮下に入り、第12師団は南湖及び湖沼地帯の通路に在り、予備軍になっていた。

最初に武昌の城壁をよじ登ることになっていたのはモーゼル銃と手榴弾を持った志願兵（第10,12師団から集められた）であった。司令部は彼らに100ドルずつ与えることを約束し、更に、最初に武昌に突入した部隊には3万ドル与えることを約束した。蒋介石は退却した者に対する銃殺刑の導入を提案したが、これは断固拒絶された。

第7軍がやって来るとすぐに、その作戦部長と顧問の И. Мамаев が偵察のために、左翼の作戦地区となる場所へ向かった。第7軍に突撃部隊の使用する攻城梯子の製作が任された。

国民革命軍が第二次東征の惠州奪取の際に犯した失策はすべて、実際に大規模に、武昌地区でも繰り返された。志願兵は、蒋介石が彼らの士気を高めるために行うヒステリカルな演説を南湖で傾聴し、その後、元の陣地まで5~6km 徒歩でのろのろ戻らざるを得なかった。梯子は命令された18時ではなく、24時にやっと届けられた。陳銘枢は強襲を1時間延期した。だが実際には、それは予定された時刻の2時間後に始められた。その結果、城壁から15~20歩の所に接近した最も勇敢な戦士は意味もなく、壁の近くに立ちどまっていた。一方、軍閥は掩蔽部の陰から彼らを射撃した。第7軍は攻撃を応援することができなかった。：《ルビコンを渡ることができなかった》。国民革命軍は200~250の兵員を失った。

朝、譚延闓、蒋介石、ブリュヘルが戦場地域に到着した。9月3日の夜、将校会議の席上で、ブリュヘルは失敗の理由を詳細に分析した：強襲は技術の面の準備がなされておらず、夜明け後に始まった。各々の指揮官の間で、作戦の各段階の予定時間や予備隊の投入経過が調整されていなかった。大砲の支援がなかった。

蔣は新たな攻撃を4日の昼間に開始することを提案した。しかし、充分検討した結果、5日に延期された。国民革命軍は全戦線に渡って同時に攻撃を行う手筈になっていた。左のグループを指揮していたのは李宗仁で、右は第4軍の副軍長であった。譚延闓が総司令官であった。蔣介石は戦いの前夜、第10、第12師団を訪れた——ナポレオンを演じる例の行為。

左翼側の攻撃は大砲3門の支援を受けて、2個連隊で行われ、右翼側は8門の大砲で6個連隊によって行われた。

城壁の東側から、葉挺の有名な独立連隊が36連隊と協力して強襲を加えた。第8軍は戦闘のまさに終り頃になってようやく参加し、しかもそれは主要な師団ではなかった。

ソ連の人々はいつもと同じように、無私で武昌で闘った。Таировの傍で、彼の通訳 Новиков が殺された；敵は Таиров のそばで二頭の馬を射殺したが、彼は相変わらず最も危険な場所へ何とか行こうとしていた。パイロット達は城壁すれすれに飛び、敵軍にパニックを引き起こした。特に際立っていたのは Саша Кравцов であった(Сергеев は当時、江西省に軍事作戦用の滑走路及び基地を設営していた)。

それにもかかわらず、9月5日と9日のこの二つの強襲は実際には、準備不足であった。適切な連絡組織が無く、その結果、途中で終わってしまった。И. Мамаев は失敗の理由を次のように説明した：《武昌は実に堅固な城であった——城壁は高さ8.5m、巾4.5~6.5mに達し、石と煉瓦で作られていた。城壁の外側にある家々は防御に邪魔だったので、第一次強襲の後、焼き払われた。城壁を攻城砲なしで破壊することは不可能であった。国民革命軍は武昌地区で、戦利品の3インチ野砲10門を持っているにすぎなかった。ところが、軍閥軍は砲艦から大砲をとりはずし、それで城の防御を強化した》。

国民革命軍の強襲が撃退された後、包囲攻撃は長期にわたる、組織的なものにならざるを得なかった。第8軍の第2師団及び湖北師団は抵抗に会うことなく漢陽を、数日後に漢口を占拠した。当地で、劉將軍が国民革命軍側に移ってきた。その軍隊をもとにして第13軍が創設された。武昌に関しては、封鎖を行い、補給路をすべて遮断し、坑道を使って城壁を爆破することによってはじめて、それを占拠することができた。

司令部は武昌にある呉佩孚の兵力を過小評価していた：そこには6千人が包囲されていると思っていた。

しかし、占拠した後、1万2千人以上であったことが判明した(これは明らかに、偵察の貧弱さを示している)。強襲に際して、技術面での準備が極めて不足していた。兵力の節約と移動の確保のために、包囲軍に対して次のような指令が出された——戦線には各部隊の最小人数だけを配置すること。国民革命軍の作戦規模が一般的に拡大するにつれて、武昌占領のために割り当てられる兵力の数量が減少した。9月11日には第7軍が、17日には第2師団が江西省に投入され、また第4軍には第8軍の1個師団が加えられた。

武昌戦区で、司令部はどちらかというと、戦争をして勝つことよりもむしろ、反動的な軍隊が一般的に持っている買収されやすい性質に基づく、伝統的な軍閥の外交を当にした。9月19日から、降伏条件についての交渉が各部隊別々に行われた。仲介者になったのは武昌から漢口にこっそり逃げていた外国人であった。

何度か、將校達は個別に城内のいずれかの連隊と了解に達した。重要な役割を果たしたのは第13軍のなり立ての司令官と、武昌防衛司令官との連絡であった。その間、城内では恐るべき飢餓状態が始まり、時折、撃ち合いが生じた。

包囲攻撃中のある時、城の包囲軍にとって重大な危機が生じた。第7軍は武昌を去る途中、大冶の山岳地域に陣取っていた軍閥軍の部隊を一掃しなかった。孫伝芳は国民革命軍と戦闘に入った際、このことを利用して増援部隊をそこへ投入した。4~5千人の部隊が武昌の包囲を解くために出撃した。彼らは理論的には、国民革命軍と湖南とを結んでいた連絡網を咸寧地区で断つことさえできた。

唐生智は自分自身の利益のために、目下の短期的な状況を利用しようとした——彼は武漢に対する支配権を完全に手中に収めようとした。蔣介石の新しい参謀長である広西人の白崇禧將軍、つまり《保定派》の支持者の承諾を得て、彼は第8軍が第4軍と交代することを命令した。当時、第4軍は大冶からの脅威を一掃してから江西省に行くはずであった。第4軍第12師団はすでに交代させられていた。蔣介石は武漢で唐生智に対抗する何らかの力を保持したいと願っていたので、激怒し、嚴重に戒告処分を宣言し、配置換えを取り消した。唐生智は主張を通そうとしたが、無駄であった：第12師団は元に戻された。

だが、司令部はその間、武昌地区で、第3湖南師団の連隊長の一人と《相互理解》に到達した。彼はその

裏切り行為に対し、旅団長の地位が約束された。彼は10月10日に南門を開ける手筈になっていた。しかし、この約束は実行できない事がわかった。それは恐らく中国の習慣通りに、門が厳重にバリケードで封鎖されていたからであろう。それにもかかわらず、城壁のこの部分の守備隊は第4軍の1個連隊に、梯子を使って武昌城内に入ることを許した。他の部隊がそれに続き、ある者は備えられた梯子を使って城壁を越え、またある者は開けられた城門を通して入って行った。

第4軍及第8軍はかなり頑強な抵抗にあった。第4軍は極めて精力的に、第8軍よりもはるかに活動的に行動し、第8軍の任務の一部さえ遂行した。

このようにして、華中で最も強力な城が陥落した。国民革命軍は莫大な戦利品を手に入れた：1万~1万1千のライフル、30~40の機関銃、10~20の大砲。捕獲品の75~80%が第4軍のものになった。戦利品の数量を正確に算定することは当時、不可能であった。何故なら、将校達は全て明白な理由から、捕獲した弾薬や武器のことを黙っていようとしたり、それらの量を少なく報告しようとした。

武昌地区で、我々顧問は重要な役割を果たした。各自の戦闘への参加状況についてはすでに述べたが、また作戦指導のかなりの部分についても実行した。かくて、第二次武昌攻撃に際し、Терниは第10師団、Паллоは第12師団、Силин (В.М. Акимов) は第2師団に所属していた。

### 福建省境での勝利

わたしは戦果について多くのことを大げさには語りたくなかった。私が顧問として所属していた連隊が決定的役割を果たした、1925年3月13日の戦い（第一次東征）について、私は急いで2、3枚報告書に書いた。《張子の虎》の暴動を鎮圧した際の珠江強行渡河について、レターペーパー1枚半で報告した。北伐の東部戦線のすばらしい戦果について、私が詳細に書くのはこれが最初である。ともかく、過ぎ去った10年が戦争をより客観的に評価すること、また各戦闘の意義を理解することを可能にしている。

1926年10月半ば、福建省と広東省の境で第1軍が敵の攻撃を完全に撃破したことを、私は今、思うかべている。

我々同志が北伐に際しそれぞれの任務を与えられた時、ブリュヘルは私を東部戦線の顧問に指名した。実

のところ、彼がいかに絶大な信頼を私に寄せていたか、私はすぐには解らなかった。その任務がいかに困難なものであるかを完全に理解したのは、かなり後になってからであった。現実問題として当時、国民革命政府全予算の少なくとも3分の1を広東省の東部が出していた。

広州自体には、極めて悪評高い第5軍のみが残っていた。その部隊は市からデルタにかけて、全地域に分散していた。第4軍長李濟深の編成されたばかりの第13師団も存在していた。最も可能性の高い脅威は福建省から敵が出撃して来ることであった。我々はこの主要な革命基地を2個師団と1個連隊で守らなければならないことになった。そればかりでなく、私は一人で行動しなければならなかった。顧問団長や他の極めて経験に富む同志達は私から1,000 kmも離れていた。

だが繰り返して言うが、私はこのことを全く理解せず、いずれかの兵団の顧問として皆と共に、北伐に自分を派遣してくれるよう執拗に要請した。

前に述べた、忘れ難いお別れパーティから戻って、私は再びブリュヘルを責めた：

——私を湖南省へ連れて行って下さい。いずれ役に立ちます。

——君は間違っている——とブリュヘルは言った。

——お言葉ですが、同志顧問団長——私は黙らず、あらたまった調子で、考え得るすべての論拠をあげる努力をした。

——もう一度言うが、あなたは間違っている——今度はブリュヘルの方が《あなた》という言い方で、あらたまった調子で言った。

さらにまた論拠をあげると、それに対し、断固とした言葉が私に向けられた。

——同じく間違っている。このことについてはこれ以上話さないことにする。私の代りにあなたが広州に残りなさい。東部で困難な状況が生じた場合には、ただちに汕頭へ行きなさい、——そして、一層柔らかな調子で、父親風に加えた：——わがままを言わないでくれ。ここでは、必要となるまでは戦闘を絶対にやらないように。

間もなく、私の同志達は一人又一人と北方へ向け出発し始めた。私は今まで自分には全く無縁であった孤独感と心の乱れにとらわれた。

しばらくの間、我々の英雄的なパイロットがまだ広州に残っていた。彼らは間もなく極めて困難な状況の

下で、作戦に加わらなければならなくなることを案じていた。気象のデータが無く、彼らはコンパスの偏差に関する情報を持たず、地上の目印にしたがって飛行するための訓練を行う時間もなかった。だが、司令部は強硬な電報をよこし、即時出撃を要求した。私がすでに東部戦線に出発してしまった後、広州に残っていた顧問が私に知らせてきたのであるが、彼らが目的地へ向け初めて飛行を試みた時、不時着せざるを得なかった。

しかし、東から広州に脅威が迫ってきていた：福建省に2個師団が新たに編成され、省の南部に軍が移動して来た。8月、広東省の境に配置されていた敵軍の編成換えが始まった。私は何応欽から一連の不安を抱かせる電報を受け取ったので、その事をボロジンに報告した。彼は私に言った：《間違いなくあなたも戦争に赴く時が来たようです》。

かくて、私は海路で第1軍に赴いた。コミュニストが私に同行した：通訳の湖南人、Fu Tachengと書類作成を担当したソ連出身の朝鮮人、朴。Fuは私の昔からの、信頼できる友人で、私達は共に雲南と広西の反乱者を撃破し、また共に第二次東征に参加した。Fuはモスクワで教育を受けた。

我々は汕頭に到着するとすぐ、自分達が今か今かと待たれていたことがわかった。棧橋で私を出迎えたのは第1軍参謀長であった。彼は全員を急いで自動車に乗せた。我々はまっすぐ駅へ向かった。そこには、二両の客車が付いた特別列車が待っていた。

潮州のプラットフォームに何応欽本人が来ていた。彼は急いで挨拶をしてから、私を用意された部屋に連れて行った。机の上に戦況を書き込んだ地図が広げられていた。《私の教育は無駄ではなかった》、と心の中で呟いた。何応欽は戦線の状況に対する私の見解を明らかに、急いで聞きたがっていた。しかし、私はすべてのことをよく考えなければならなかった。そこで、窓の外に広がっている実に素晴らしい湖や山の景色に魅せられたようなふりをした。私は自分の前途に何が待ち構えているか十分にわかっていた。何応欽は作戦及び訓練の課業を全面的に私に任せようとした。一方、自分は補給関係の仕事をしようとした（この事を彼はすばらしくうまく処理してきた）。私の顔色を見て、彼は譲歩せざるを得なかった。《食事にしましょう》と言って、豪華に飾られたテーブルに招いた。

私はここに到着すると、状況の検討に没頭した。我々は2個師団——第14、3師団及び独立連隊を持ってい

た。第14師団のことを私は非常によく知っていた。これは実質的には黄埔第1師団であった。異なる点は、蒋介石がその師団の第2連隊を廃止し、読者も知っている、第二次東征時の三水グループである、彼の最良の連隊をそれに当てたことだけであった（この連隊には第42連隊という名称が与えられた）。第一次東征時に行動を共にした第1連隊は今や40連隊、第3連隊は42連隊になっていた。

第40連隊は第二次東征後、《Валеры 同窓会》のメンバーが加ったことによって汚染された。だが、《中山艦事件》の後、その中の最も活発な扇動家達は蒋介石の支えである新しい第1、2、20師団に昇進して転属した。士気そのものは《中山艦事件》のずっと前に、中国共産党員によって養われていた。

作戦を前にして、第14師団は次のように配置された：第40連隊——潮州、第41連隊——汕頭、第42連隊——棉湖。師団全体で約3,500丁のライフル、25丁の重機関銃（その中の18丁はロシア製）があったが、弾薬は大変不足していた。大砲としては、野砲《有坂》を原型とし、薬筒を手作業で改造した日本製山砲2門と、その他、博物館の展示品にふさわしい、楔形の尾栓を持つクルップ製山砲1門があった。それは1870年、普仏戦争の時、ドイツ人がフランス人を粉碎した大砲の一つであった。この師団の長は三水グループのかつての司令官である馮軾裴であった。

第3師団にはライフル3,000丁以上があった。そこには広東の重機関銃9丁（全部が整備済みというわけではなく、弾薬の量も不足）、軽機関銃30丁、大砲4門（3門はクルップ製）があった。各連隊は次のように配置されていた：第8連隊——梅県、第7連隊——興寧、第9連隊——三河坝。

この師団は第7広州旅団をベースにして再編成されたもので、《騎兵師団》という皮肉なあだ名を得ていた。その師団の問題点は、第一次東征の際、それが淡水や棉湖地区で総崩れになり、また第3師団になっていた第二次東征の際にも、その行動はそれ程改善されていなかったことである。だが、その第8連隊は惠州強襲の際、誠実な活動によって名声を得た。第7連隊は以前、三水グループに属していた。第二次東征の後、第3師団は黄埔軍校を卒業した指揮官達や共産党の政治工作員によって強化され、さらに、戦闘能力の向上のために私の属しているこの師団で、大きな努力が払われた。

張貞の独立連隊（兵員1,000人）について言えば、そ

れは漳岡に駐屯し、装備は劣悪で、概して戦闘力に欠けていた。私は我が方の軍隊に関するデータを総括して、極めて悲観的な結論に達した。

漳州には兵員1万人の軍閥軍第1師団が駐屯し、日本の帝国主義者から十分な補給を受けており、大砲8門と機関銃15丁を備えていた。永定には兵員1万2千人の第12師団が駐屯し、督弁である周陰人が500人の親衛隊を伴って到着するのを待っていた。10月6日、彼は到着すると、大部隊（混成旅団）を広東省との境にある峰市に派遣した。彼自身は永定に4,000人の旅団と5門の大砲を持つ親衛隊と共に残った。

第1師団は漳州から南西の方向に移動し始めた。それは明らかに、豊かな潮州——汕頭地域を占拠しようとしていた。岩前には李鳳翔の第3福建師団が配置されていた。彼は国民革命軍側に移る気持になっていたが、何応欽としかるべき話し合いを行いつつも、ためらっていた。

従って、たとえ第3師団を度外視しても、敵の優勢は全く明らかであった：砲18門、機関銃25丁を持つ22,000人に対し、砲7門、重機関銃34丁を持つ9,000人。敵軍の配置やその始まった移動を見て、敵軍はかつて陳炯明が成功裏に実行した作戦を繰り返そうとしていることに私は気がついた：梅江、韓江及び潮州——梅県間の道路によって囲まれた三角地域に配置されている部隊を、はさみ撃ちすること。

私の結論では、恐らく唯一の方法は次のようなものであった——最高の機動力で、同時に両師団を用いて敵を部隊ごとに各個撃破すること。だが、誰とこの作戦を実行するか、私にはまだはっきりしていなかった。

その間に、第3師団の使節が何応欽に、国民革命軍が督弁周陰人の部隊を一つでも撃破すればすぐに、国民革命軍側に移るつもりであると言明した。このことは一層我々を積極的な攻撃に出る気にさせた。だが、総司令官とブリュヘルの命令によって、我々は先頭を切って戦闘行為を始めることができなかった。我々はブリュヘルの禁止が妥当なものであることを理解せず、戦闘行為を熱望していた。我々が福建省攻撃に移ると、孫伝芳との戦闘に入ることになる。これは我々にとって極めて不利なことであった：呉佩孚はまだ撃破されていなかったし、また武昌地区での封鎖が長引いていた。その上、蔣介石と唐生智との間に大きな摩擦があった。我々はこうした事をすべて知っていたわけではなかった。

私は状況を十分に検討して、確固とした結論に達し

た：第1師団に対し先制攻撃をしてはならない。何故なら、もしそうすると、督弁の周陰人は永定から南へ進撃し、我々の後方へまわるであろう。彼は松口圩から河に沿って混成1個旅団を配置することが可能であった。

もし混成旅団が松口圩に攻撃をしかけても、それを攻撃し始めることはまた、我々にとって不利である。我々と敵軍との間に梅江があり、督弁の軍隊はまたもや我々の後方に対して脅威となるであろう。こうした状況下で、第3福建師団がどちら側につくか判断することは困難であった。

唯一可能な計画が徐々にはっきりしてきた：先ず督弁周陰人を強襲し、永定地区で彼のグループを撃破し、その後で、背後から混成旅団を攻撃し、それを撃破した後、船を用いて梅江と韓江に沿って第1師団に向かって急進撃を行う。そうすれば第1師団は潮州に到達する時間的余裕がないであろう。我々が自ら敵軍に包囲されるように進むなどとは、彼らは恐らく信じないであろう。そこで Суворов 是論すように言った：《敵を驚かすことは、取りも直さず敵に勝つことである》。

作戦を成功させるためには、督弁をほとんど一気に撃滅することが必要であった。もし彼が自ら我々に向かって来るなら、それが一番よいであろう。この場合、山陵によって彼は混成旅団や第1師団側からの予想し得る支援から、確実に切り離されるであろう。その上、第1師団は潮州と汕頭を占拠できる可能性を目の前にしながら、督弁を援助するために方向転換をすることはないのである。督弁の方も、第1師団長が督弁抜きでこの二つの市を占拠することを認めたくはないであろう。それ故、督弁が我々に攻撃をしかけるのは、混成旅団のいるルートを使ってではなく、大埔——三河坝の方へ移動して来る、と我々は確信していた。

我々の計画を実行するためには、敵軍が立てた計画の遂行を妨げることができるよう、味方の師団を配置することが必要であった。一方、我々は一日で、2個師団を1つの特別攻撃隊に編成することが可能であった。第14師団を高陂圩へ、第3師団を松口圩へ、独立連隊を饒平（旧）へ移動することが決定された。何応欽將軍は私の計画に同意した。

師団はそれぞれの新たな配備地点に到着した。我々は再び司令部に、福建の敵軍に対し先制攻撃を行うことを許可してくれるよう上申書を書いた。無論、我々は自分達の計画を、少なくとも秘密事項であることを考えて、詳細には書くことができなかった。我々は四



通の電報を次々に、北方にある司令部宛に打ち、さらに特別の親書をボロジンに送った。ボロジンの回答はもっともなものであった：《総司令に照会しなさい》。だが、司令部は返事を寄越さなかった。ところが、諜報機関の情報によると、10月8日督弁は攻撃に転ずる予定であった。ついに、返事が届いた：《政治的配慮から司令部は先制攻撃を許していない》。

何応欽はいつものように、意気消沈し不平を言い始めた。気分を変えるために、我々は狩に出かけた。私は藁の中で梟を射ち落してから何応欽將軍に言った：《これは我々がやっつけた督弁だ》。それからキジバトを射ち落し；つけ加えた：《今度は混成旅団長だ》。何応欽が面白がった様子を、皆さん想像してみてください。

当時、孫伝芳との話し合いが丁度進行中であったことを知らず、私はブリュヘルが進撃を認めなかったことで、彼を心中《こき下した》。後で分ったことだが、ブリュヘルは我々の編成換えに関する報告を受け取った際、その目的が理解できなかった。早くも1927年に漢口で、彼はある時私に語った：《私は心配した——敵はただでさえ諸君達を包囲していたのに、君達は敵を手助けしようとしていた。君を信頼している事が本当に正しいのかどうか私は考えた。だが、君は正にJominiのやり方で、優勢な敵を囲まれた内部から外へ向かって見事に打ち破った》。

ところで、敵は攻勢に転ずるために前もって予定していた場所を、何事もなく確保した。我々の方はいらいらし続いていた。実に奇妙なことだが、我々を救い出したのは敵であった。10月8日、混成旅団の斥候隊が省境を越えて来た。この事によって、敵が我々を攻撃してきたという口実を我々は手にした。しばらくして、敵は突然攻撃を始めた。

第14、第3師団は10月9日、三河坝に集結し終った。その移動を隠すために、次の手段がとられた：高陂圩に移動していた独立連隊が第14師団であるように見せかけることになっていた。第3師団に見せかけることになっていたのは、松口圩に残された第3師団の1個連隊で、その連隊長は師団長代理のGuzhu Tongであった。彼には次の任務が与えられた——敵の混成旅団が攻撃してきたら、それと戦いながら梅江の向こう側に退却すること。それを再度渡河することは許されない。

10月10日、我が軍の主力——5個連隊は永定に向かって進撃を始め、大埔を占拠し、10月11日にTaipingに到達し、10月12日、第3師団は前衛部隊として

北東に進撃を続けながら、督弁の進撃中の部隊を永定に押し戻した。朝方、永定市を占拠した。督弁は親衛隊と共にやっとのことで逃げ出した。10月13日、我々は峰市に到達した。10月14日、我が軍は敵の混成旅団に奇襲攻撃を行った。その旅団は松口圩を占拠し、梅江を渡河しようとしていた。我々は敵を馬蹄形の戦線で河に追いつめ、撃破した。敵の旅団長は小部隊を率いて脱出したが、間もなく第3福建師団によって武装解除された。その師団はすでに我が方に移り、国民革命軍第17軍という名称を得ていた。

勝利は完全なものであった。我々は多くの捕虜、ライフル4,000丁、ピストル8,000丁、機関銃22丁、大砲9門等々を手に入れた。我々勝利者は限りなく歓喜した。各師団長や連隊長は当作戦が完了したことを実感して驚いた。第14師団長馮軼裴は通訳のФедоровに言った：《あのような危険を伴う作戦を遂行することは多分ロシア風で、素晴らしいことであろうが、我々の考えでは、即ち中国風では、この作戦は危険であると顧問に言って下さい》。何応欽宛に何百通もの祝電が届き始めた。私は喜んで彼が栄光に浸るにまかせた。ブリュヘルが成功を認めてくれたことは私にとって大きな満足であった。《あなたが勝利したことを心から喜ぶ。赤旗勲章の二度目の叙勲申請されたことを祝福する》と彼は電報を送ってきた。この約束された叙勲は結局、私の知らない理由で与えられなかったことを言っておかねばならない。

この勝利の後、我が師団は舟艇に乗船し、敵の第1師団撃滅のため河を下って行った。

敵の第1師団は自軍の中央及び左翼の部隊が壊滅したことを知って、あわてて漳州に引き返しているという、独立連隊長からの報告が三河坝に届いた。敵の狼狽にともなって生じた種々の可能性を徹底的に利用し、並行して追撃を行うことを私は提案した。

第3福建師団が国民革命軍側に移り、第17軍と改称した後、何応欽が第1軍軍長になった。彼は私の提案に対し最初はためらい、広州からの冬の被服の到着を待つよう提案した。それでもやはり、彼は理性の声に従った。

永定を通り、我が部隊は急速に北方へ進撃し、漳州と福州の間のある地点で第1福建師団を海に追いつめた。敵は国民革命軍に移るに際しての条件を決めるために、使いを送ってきた。だが、そのすべての条件を考慮した結果、我々は敵を武装解除することを選んだ。その後、福州に駐留していた福建旅団の指揮官の一人

が自分は国民革命軍側へ移るという声明文を付けて、使節をこちらへ送ってきた。新編第17軍は福建省中央部を通して上杭―連城―南平方面へ向かった。我々は《鉄は熱いうちに打て》という諺を指針とした。そしてそれは全く正しかった。

### 北伐第一段階における国民革命軍

その間、北方では軍事行動が益々大規模に展開されていた。国民革命軍は極めて広範な地域を解放した。これによって何百万人もの人々が国民革命陣営に加わった。

中国革命にとって極めて重大なこの時期に、蒋介石と非凡な機敏さを見せる唐生智との間に、支配権を求める激烈な闘争が生じた。

蒋介石は正式に国民革命軍を指揮していた。7月7日、彼は北伐軍総司令と宣言され、同時に軍事委員会のすべての権限が彼に渡された。彼の取りまきである張静江は蒋介石のために、国民党中央執行委員会議長の職を自ら辞退した。かくて、蒋介石は軍事及び政治権力を正式に自己の手中に収めた。7月27日、彼はブリュヘルに伴われ、極めて高揚した気分 で北方へ出立した。

だが、その途中でもう彼の気分は急変した。彼は唐生智を長とする《保定派》が気脈を通じていることを知り、あわてた。彼は次のような計画さえも思いついた：事態の進行を十分に制御するために、主力軍を広西省に派遣すること。蒋介石は予期せぬ苦境に陥り、またもや大衆に取り入り始めた。多くの政治集会で、彼は労働者及び農民運動の必要性を熱っぽく、長々と話した。ある程度、蒋介石は大衆の若干の指導者及び一部のソ連顧問達の警戒心を鈍らせることができた。

1926年8月15日、蒋介石は長沙に到着すると、《保定派》が結束していること、また総司令という自分の地位が危ないことを確信し、悲哀を感じた。無論、彼は自分の演説の中で、大衆は少し右寄りになり、湖南省政府はもっと左寄りになることを希望すると述べ始めた。彼は中央執行委員会5月総会の決議によって規定された数よりもさらに多くのコミニストのメンバーを、国民党省委員会に選出することにさえ同意した。この事は、蒋介石が規定数に応じてコミニストを国民党諸機関に入れることさえも許さなかった6月―7月の、広東における彼の態度とはひどく対照的であった。

かくて、北伐の過程で生ずる革命運動の高揚が蒋介石の政治的立場に影響を与えるであろう、と期待していた我々同志の予想はある程度、正しかった。

当時、蒋介石は軍隊内に自づからより強力な、何らかの武装支持グループを創設するために、多大の努力をはらった。湖南省西部において、彼は第1師団と袁祖銘の第9軍を親しくさせようと努力した。武漢地区で、蒋介石は第10師団を味方に引き入れようとした。また第2、第3、第6軍の軍長の機嫌をとった。

国民党《左派》は政治局を指導していた鄧演達も含めて、蒋介石が第10師団に《言い寄る》のに協力した。当時の中国共産党指導者陳独秀でさえも、誤った立場をとったことを思い出さざるを得ない。彼は英国の諺にしたがって判断した：《悪魔は悪魔である。だが、それでも、昔からの悪魔の方が新しいものよりましだ》。陳独秀は蒋介石が唐生智よりも革命により近い立場にある、と考えた。

蒋介石は最も活動的な《保定派》の一人である第10師団長陳銘枢に、武漢衛戍司令官のポストを約束し、第3軍長朱培德には江西省の督弁の職務を約束した（これと同じことを彼は Fang deng Tian にも提案した）。

湖南における、蒋介石の主要な支えである第1軍の第1、第2師団はそれ程良い状態ではなかった。その兵員の約3分の1は病人や脱走兵であった。

昔からの蒋介石の信奉者である右派国民党員王柏齡は郴州（湖南省）に到着し、第1、第2師団の将校会議を召集した。幕僚の一人が部隊内の脱走、掠奪、アヘンの吸引、賄賂等について、公然と報告し始めた。王柏齡は彼の話しを遮った：《この2個師団が黄埔出身の師団であることを君は知らないわけではないであろう。それは全てでたらめで、共産党が広めている中傷である》。しかし、間もなく、彼は悲しむべき事実を認め、蒋介石にそのことを報告した。

我々が知っているように、蒋介石は自分の軍隊の士気向上を必要としていた。彼は中隊内での政治委員の職務を不本意ながら復活し、鄧演達にこの為の要員を要求した。師団にやって来た政治委員の内、12人はコミニストであった。

こうした事すべてを試みても、蒋介石は自分の影響力を充分に強化することができなかった。また武昌陥落の時までは、彼は軍事指導者としての名声を失っていた。蒋介石は北伐の間中、城市の一つも取得できなかった。彼が江西省で孫伝芳と戦った初期の戦いで敗北を喫した時、彼の立場は全く哀れなものとなった。以

前、彼は湖北省の支配権を獲得することを本気で考えていた。彼は自分を長とする湖北省政府のメンバーを指名することさえした。今や、彼は揚子江中流地域及び武漢地域で第一の座を唐生智に譲らざるを得なかった。

北伐は中国共産党の前に新しい可能性を開いた。中国の共産党員達は自己犠牲とヒロイズムによって、軍隊内に確実な権威を得た。しかし、中国共産党が完全に掌握していたのは葉挺の名声ある連隊のみであった。その連隊こそ、国民革命軍の主力前衛軍として北伐に出撃した。

葉挺は5月19日、部隊の集結と江西省側から第8軍の右翼を掩護する任務を帯びて、広州を出発した。連隊の兵員は2,000で、その中に相当数の共産党員や彼らに共感を覚えた革命的な若者がいた。間もなく、江口—涪田—黄茅鋪地区で呉佩孚の4個連隊が第8軍の部隊に攻撃をしかけてきた。その部隊は急襲に耐えきれず、逃げ出した。唐生智は救援を求めて至急電報を送った。葉挺の連隊は突進し、7月2日、敵軍に遭遇し、これを撃破した。これが事実上、北伐の始まりであった。

主要な会戦で《鉄軍》が果たした決定的な役割について、私はすでに述べた。我々顧問達は葉挺の連隊を強化するために、できる限りのことを行った。

葉挺が顧問の助言もあって李済深の中隊長に任命された1924年以来、私は彼のことをよく知っていた。葉挺の軍事的才能はすぐに注意を引きつけた。そして1925年12月にはもう、第34連隊長になった。私は1938—1939年、重慶で再びこの背の高い、均斉のとれた、常にきちんとしている将校に出会った。当時、彼はすでに第4軍司令官という重要なポストに就き、江西省北東部と浙江省北西部で日本帝国主義者と戦っていた。

彼が非業の死を遂げた時、ソ連の顧問達は皆、中国の共産党員と共に悲しみを分かちあった。葉挺は自分の詩の一つで将来を予言した。

地下の炎が突き破り、  
我が遺体の生きた影が舞い上り、  
旗が誇らしげに真赤になり始める日を、  
私は待ちわびている。  
新たな生命が強力な流れとなって打ち始め、  
私達のことを歴史は若者に語りかけ、  
あかあかと燃える炎の中、わきたつ血の中で、

私は永遠に生き続けるであろう。

中国共産党は北伐期、政治活動を自分の指揮下におくために多大な努力を払った。宣伝工作者養成のために3カ月のコースを行う委員会（その中に2人の共産党員が入っていた）がつくられた。

各連隊に、広東大学の学生国民党員及び黄埔軍校政治コースの学生から成る、宣伝工作者グループが配置された。このグループの中央組織を兼任で指揮していたのは政治局長官である、左派国民党員の鄧演達で、Таировが彼の顧問であった。

戦闘方面で最も信頼できたのが第4、第6軍であったのは偶然ではなかった。というのは特に両軍に集中的に政治教育が行われたからである。第6軍の政治委員は最古参の革命家の一人、中国共産党員林祖涵で、彼の次長は共産党員の李であった。第6軍の前任の顧問、Н.И. Кончик 将軍はこれら同志の行為を評価し、次のように述べている：《行く先々で、政治部は大衆団体、農民組合、国民党地方組織と連絡をとり、合同会議、政治集会を開いた。そこでは、政治工作者以外にしばしば、兵士や将校達が演説するのを見ることができた》。

第4軍顧問の Горев は報告した：《第4軍は優れた戦闘能力のある軍隊であると言う時、その軍事能力以外に政治仕事を尊重することでも遅れをとらず、またその結果（これが重要なことだが、）についても相当良好であることは否定することができない》。

北伐を前にして、Mei という人が李済深の推薦により第4軍政治部長官に任命された。彼は右派と密接な関係を持っていたが狡猾で計算高く、扇動の有効性を理解しており、それ故、行政部の長官である共産党員と近づきになり、この任務を彼に委ねた。それと同時にまた、彼は扇動工作が拡がるのを妨害した。《軍政治部の活動は結局のところ、部隊の後を追ってビラを貼ることや、政治集会を持つことぐらいであった。師団の指導に関する活動は全く問題にならなかった》、と Горев は述べている。

武昌地区で、Mei は第12師団政治部長官の共産党員に替えられた。今や、Горев は事態の根本的な変化を確認した：《武昌占拠後、第4軍政治部は大衆及び党委員会（国民党委員会——筆者）と関係を保ち、地方党機関の活動に参加して自己の活動を行っている。国民革命軍の中で最良のものは第12師団の政治部である。長官は共産党員である。彼は陝西人であるが、皆は彼を自分達の仲間であると思っている。彼は

第12師団内で政治工作を組織することに成功したので、そこでは、政治工作者達は戦闘員の一人と見做されている。第12師団政治部は戦士の教育に関して師団内で大きな仕事を成し遂げたと同様に、住民の中にも色々な種類の社会組織を創設した。第12師団では、戦士達は何のために戦っているかを形式的にはなく、実質的に理解していた。第12師団が進んでいく所では、大衆は組織されていった。第12師団の政治工作者達は戦場で、国民革命軍の政治工作者にふさわしい振舞いをした》。

第10師団の状況はこれよりもいく分悪かった。政治部長官である、右派国民党員李はその仕事を駄目にし、その職を解かれた。その代りに、若い《左派》国民党員が任命された。

Горевは疑いもなく政治的鋭敏さを持っていた。それ故、国民革命軍の政治工作者の努力に対する彼の全体的な評価は興味深い：《住民は無条件に我々を支持している。そして政治工作によって、非常に積極的に支援している》。同時にまた、Горевの鋭い眼光は政治工作における根本的な欠点をも見逃さなかった：《各々の政治機関の活動の中で欠けている主要なものは系統的組織化である。他の部隊と協調して活動する計画は全くなかった。それ故、我々の政治部が行ったキャンペーンと、我々の後にやって来た部隊の政治部のキャンペーンとが異なることもあった。上層部からの活動の指針は与えられず、活動の報告は求められなかった。また指令もなかった。このことを軍事委員会政治訓練部のせいにはすることはできない。何故なら、それは権限も権力も持っていなかったからである》。

政治活動はこうしたすべての欠点にもかかわらず、国民革命軍の成功の中でめざましい役割を果たした。

### 主要な同盟者の成功と失敗

馮玉祥が中国を離れると、彼の部隊の司令部内の反動分子は活気づき、特に張督弁は元気を取り戻した。彼は Лапин との会話の中で次のように公言した。自分はすべての敵と和解することが必要であると考えており、その中には張作霖も含まれている。彼は《自分もまた、国家を救うために戦っているが、方法は異なっている》と言っている。

馮玉祥軍の高級将校達が持っている軍閥的気質、また彼の軍隊全般に見られる不満足な状態が重大な敗北をもたらし、そして最も重要な防御線である峠——南

口の陣地の喪失をもたらした。Лапин はこの要塞を引き渡す2週間前、ここを視察する機会があり、そこをとても高く評価した。地形が極めて有利な自然条件を備えていたので、当地に殆ど難攻不落といえる要塞を建造することが可能であった。西欧の軍事技術の最新の成果を取り入れて建設されたこの要塞線は延長、50 km 以上であった。ここには電流の通っている有刺鉄線や中国の条件では珍しい、砲火に対する待避壕さえもあった。南口は長くもちこたえることが可能であった。それにも拘らず、それは放棄された。帝国主義列強のスパイに対する將軍達の姿勢がこの敗北に手を貸すことになった。一人の日本人顧問が張督弁の最も重要な人物であった。彼は一等客車を自由に使用していた。一方、我等が同志達は不平一つ言わず、《旅客輸送用暖房貨車》に乗り方々に出かけた。張督弁の隣りの部屋に、もう一つの帝国主義列強の代理者であるアメリカ人宣教師が住んでいた。彼は馮玉祥の第二の敵、吳佩孚に好意的であった。彼は中国語に堪能で、何もかも知っていた。張家口付近で2台のアメリカ製無線機が発見されたのは、偶然ではなかった。

一体、いかなる事情が南口の陥落へと導いたか。7月、奉天軍は迂回行動をとって南口陣地を迂回し、熱河省北部を通過し、多倫に侵入した。この地区に、ソ連顧問が創設した騎兵2個旅団、及び歩兵数個旅団が特に追加投入された。敵の不意の攻撃を撃退することに成功した。我等が同志達は当地の司令官宋哲元に、奉天軍を追撃する必要があることを強く勧めたが、彼はこの理にかなった提案を断固として拒否した。結局、敵軍は自分を立て直すのに2週間かかったが、その後、反撃を行った。当時、多倫に駐留していた国民軍の1連隊がすべての兵器を、不注意にも遠く離れた所にあるキャンプ地に残したまま、陣地を構築していた。奉天軍の騎兵隊が突然、襲撃してきた。そして極度のパニックを引き起こし、総崩れとなった。

張督弁は南口防衛を指揮している司令部から、鹿將軍に電話で事態を知らせた。鹿將軍は包囲攻撃されないために、1,2日後に Pin de chan に向け出発することを決定し、軍隊内にその予告をした。

その後、事態はすべて、中国軍閥の《最上の伝統》流に順調に展開した。將軍達は自分の軍隊の保持だけを考えており、共通の問題については考えなかった。翌日の夜明け、南口陣地の中央部分を守備していた師団長が隣接の部隊の同意なしに、自分の軍隊を撤退させた。奉天軍はすぐにこれを利用した。このことがあつ

た後でさえも、ごくわずかの兵力で敵軍をくいとおめることが可能であった。何故なら、守備と組織的撤退のためには極めて好都合な、狭い峠道が30 km 余り続いていたからである。しかし、集団的パニックが始まった。軍隊はろばや牛に家財道具を乗せて逃走した。

敗北は重大であった。だが、馮玉祥が1926年9月、中国へ戻って来ると、状況は次第に好転し始めた。馮玉祥は国民軍が退却したという情報を入手する前に、モスクワを出発していた。中国から彼のもとへ、至急帰って来て欲しいという電報が引きも切らず送られてきた。結局、モスクワでは同志達が彼の不在によって危険が引き起こされることを理解し、將軍に帰国を急がせた。彼は自動車でウランバートルを経て、包頭の西、五原に向かった。

馮玉祥は極めて慎重に、且つ、如才なく振舞った。五原で彼は将官会議を開き、そこで、当然の罰を予想していた部下達に、南口をめぐる敗北の責任は自分がとると言明した。そのほかに、彼は全将校の階級を、まるで彼らが勝利したかの如く、上げた。それと同時に彼ははっきりと言明した：《今後、我々は国民党の旗の下に立ち、その旗の下で前進しよう》。最初、彼は絶えず集会や会議で演説し、帝国主義諸国に対する中国の責務を国民軍が拒否することやソ連の政治機構の長所、その他について語った。五原、平涼、西安でこの事が行われた。

將軍達の一致した賛同を得て、軍はかつての自己の名称——国民軍（国民連軍）を復活し、地理的な名称である西北軍を放棄した。直隸省のかつての督弁は国民革命軍という名称さえも提案した。だが、馮玉祥は、戦って初めてそのような高尚な名称を得なければならぬことを口実にそれを拒否した。

馮玉祥が慎重であることは1926年9月、彼が発表した宣言の中に見られた。そこには、国民軍の主要な任務は独立、関税自主権、不平等条約廃止を求める闘いである事が指摘されていた；若干の政治的約束も発表された——集会の自由、その他。馮は社会制度の変革にかかわる社会的要求はいかなるものでも、綱領に入れることに微妙に反対し、ソ連の顧問達に言った：《変革のプログラムは偉大なことではあるが、先ず、帝国主義に対する抵抗に力を集中しなければならない》。

馮は《天才的》単純さで、自分の軍隊内で国民党的要素を強化する問題を解決した。彼は指令を出した：全員国民党に入党すること。そして彼の帰還の2カ月後すでに、1万人が国民党員となり、3カ月目には4万

人となった。將軍達は機械的に師団や兵団の党委員会メンバーに選ばれた。

このようなやり方で政治的処理を行うことは、無論、軍にすばらしい成果をもたらすことはできなかった。А.А. Лапинは1927年6月、漢口の顧問党細胞会議で話した。自分は、国民軍が戦線迂回を行った時、その指揮官達が信じ難い程無学であることを確信する機会を得た。張督弁の司令部の何人かの将校は不平等条約とは何であるかを知らず、国民革命軍が孫文未亡人の指揮のもとで戦っている軍隊である、と心から思っている。ある将校は、我々顧問達が宗教に対して極めて自由な見解を述べるのを聞いて、本当に驚いた：《あなた方は本当にロシアの宣教師ではないのですか》。ここに居合わせた馮將軍は急いで話題を変えた。

顧問達が戦士の政治的教育に配慮するように根気強く勧めた時、馮將軍はびっくりした振りをした：どうして、これが政治工作ではないのか。軍全体が国民党員ではないか。

こうしたことに拘らず、馮のとった立場は、彼の支配下にある地域で中国のコミュニストが活動する可能性を、ある程度開いた。馮と一緒に中国共産党の重要な活動家の一人、劉伯承がモスクワから帰って来た。彼は国民軍政治局の次長になり、事実上、全工作进行を指導した。何故なら、政治局の長の職務に、結局のところ、誰も任命されなかったからである。

А.А. Лапинの指摘によると、当時、馮將軍の行動を決定したものは無論、ソ連での体験の直接的影響だけではなかった。彼は国民革命軍の成功と、国内における革命の状況の全般的な進展を考慮せざるを得なかった。

馮の支配下にある地域の状況はなかり複雑であった。国民軍が北京から甘肅省に退却した後、コンとチャン両將軍が反乱を起こした。前者は蘭州市を包囲さえした。それ以外にも、馬姓の5人兄弟を長とする2万の中国回教徒軍が甘肅省に存在していた。この二人の反乱軍の將軍は馬一族の長に中立を守ってもらうために、甘肅省督弁の地位を約束した。

困難な状況が陝西省で生じた。ここでは、色々な町で第2、第3国民軍の約4万の兵が包囲された。国民軍の兵を包囲攻撃したのは軍閥の劉鎮華であった。省都西安で約1カ月間、8千～1万の守備隊が閉じこめられた。馮の部隊にはパトロンがいなかった。彼らの間では、山賊行為がはびこっており、省内には権威ある指導者がいなかった。西安は近日中に陥落する可能性が



あり、緊急対策をとることが必要であった。甘肅から救援部隊として4個旅団(兵員約1万名)が送られた。

陝西省の事態を収拾することのできる人物を求めて、馮玉祥は先ず于右任を選んだ。于は陝西省生まれで、1911年の辛亥革命以後、多少とも進歩派と見られるグループを支持して、陝西省で何度か戦った。馮玉祥は彼の人気に期待をかけた。彼は于右任に自分の代理として、或いは省軍の司令官として、陝西省に行ってくれるよう提案した。だが、于は自主性を得ようとして、官職の任命を拒否した。陝西省西安の包囲を解くために、于と一緒にA.A. Лапинが赴いた。だが、于自身は自分の能力を過大評価し、また馮も彼の権威を信じたのは間違いであった。A.A. Лапинは次のように書いている《我々が陝西省に近づくにつれて、將軍達は喜んで彼を迎えるつもりがないことがはっきりしてきた》。

A.A. Лапинは兵力で優勢な敵軍を撃滅するためには、統一的な作戦指導が必要であることを知っていた。それ故、彼は不本意ながら、于右任に馮玉祥の提案した指名を受け入れるよう勧めた。そして総司令部付きの顧問Усмановに、それに関係した電報を送りさえもした。しかし、馮は今では、于の能力を信頼しなくなり、拒否した。

その間、西安の状況は危機的になっていった。軍の士気を急いで高めるためには、たとえ小さくとも成功が必要であった。彼もまたやって来た：大したものではないが、二つの勝利を得て、イニシアチブを握った。1カ月間陝西のいくつかの町で戦争が行われた。この省の町はすべて1862-1874年の回教徒住民(東干)の有名な反乱の時、城壁がつくられた。いくつかの県城の包囲を解き、第2、第3国民軍の1万5千-1万6千の兵を解放することに成功した。

Лапинの全く正しい助言にしたがって、北方からやって来た軍は自分の部隊を戦闘に投入せず、温存していた。こうして予備師団を編成することができた。同時に、農民の間で政治工作が始まった。いくつかの県では会議や集会が行われ、農民組織が成立し、三原がセンターになった。

予備師団が南から西安を迂回して送られた。1926年11月26日、西安は解放された。

西安の包囲は悲惨そのものであった。町を恐るべき飢餓が支配し、最後の数週間、一日に100人以上の住民が死亡した。西安では陝西省の他のすべての町と同様に、国民軍出身の昨今の軍閥達が略奪をいとわな

かった。包囲された軍隊は住民から食料を徴発し、その後で同じ住民に闇値で転売した。普通の兵士でも包囲されている間に、数千元近く儲けることができた。司令官の李鴻森のところに莫大な金が集まった。

封鎖が解かれた後、于右任と第2、第3国民軍のグループの間で、陝西省での権力を求める闘争が展開した。

当時の馮玉祥軍の団結はそもそも、極めてもろいものであった。例えば、馬君武に対して軍事行動をとった時、第2国民軍の部隊は馮の第6軍が通州に入ること拒否した。他のもうひとつの例：司令官が1万5千の兵を西安付近に移動させようとした時、彼は徹底的な不服従に出会った。

もし馮玉祥軍について上記の事をすべて総括するならば、次のように結論づけることができる。北伐の最重要作戦の時、馮玉祥軍は自分自身の作戦基地を奪還することに忙しく、国民革命軍を積極的に支援することができなかった。

A.A. Лапинが国民革命軍の陝西地区に於ける作戦で果たした役割を、初めて公開することができたことに心から満足している。これはラトビア民族の立派な息子の、英雄的伝記の中の興味深い一頁で、彼のすばらしい思い出に捧げられた出版物では触れられていない。

### 孫伝芳の壊滅

国民革命軍が揚子江に到達し、呉佩孚を壊滅した後、革命武装勢力の華中における唯一の重大な敵は孫伝芳となった。この時まで、彼は勝ち誇った南方軍の自分に対する脅威を充分に知っていた。だが、国民革命軍司令部側も、孫伝芳が呉佩孚よりもはるかに強力な軍隊を擁し、かくて彼を相手にするのはそれ程容易ではないと考えていた。その上、9月、偵察の報告によって次のことが解った。湖北省西部に駐留している四川省の將軍楊森は国民革命軍第20軍長ではあるが、敵対的な意図を有していた。以上の事すべてが慎重な行動を要求した。

9月、孫伝芳と暫定的協定を結ぼうとする試みがなされた。9月20日、蔣介石は萍郷から交渉中の鄧演達將軍宛に電報を送り、停戦条件を提示した。鄧演達は軍閥の代表者達にその条件を受け入れるよう一晩中説得したが、彼らはそれが降伏同然であると繰り返した。しかし、条件とは極めて軽いもので、ただ孫伝芳の軍隊を安徽省へ移動することであった。その後、鄧演達

と唐生智は九江にある孫伝芳の司令部に手紙を送り、撤退に加えて、軍事行動の停止及び江西、浙江両省に国民党委員会を復活させることを要求した。孫伝芳の軍隊内にも、奉天軍と戦うために孫を国民革命軍と和解させようと試みた將軍達もいた。だが、交渉は現実的ではなく、それはただ、大規模な進攻作戦の準備を隠す役割を果たしたにすぎないことがすぐに明らかになった。

早くも9月初め、孫は自分の方から先に攻撃に出ることにした。彼は南昌―九江間の鉄道沿線に3個師団と8個独立旅団(兵員6万)を増派した。安徽省から湖北省東部に1個師団と数個混成旅団(2万~2万5千名)が派遣され、江西省西部には2個前衛部隊が送られた。

蒋介石は湖南省で弱体化した自分の立場を何とか強化しようとして、ブリュヘルには知らせずに孫伝芳の先を越すことに決め、全く準備のない行動を始めた。1926年9月2日、彼は3日後に攻撃を開始するよう指令を発した：第6軍は涂家埠をめぐる会戦の後駐留していた通城から修水に向かうこと。第3軍は萍郷へ。第2軍は吉安へ。全部隊の最終目標は南昌であった。

第6軍と蒋介石の第1師団は成功裏に作戦を開始し、9月16日高安を占拠した。その時もまた、第6軍長程潜は極めて無謀な決定を下した。彼は朱培徳の第3軍が到着する前に、南昌を占拠しようとして企てた。

程潜は蒋介石の命令により、朱培徳の下位につき、このことをひどく不満に思っていた。程潜の顧問Н.И. Кончицは彼に無謀な行動をとらないよう説得したが、無駄に終わった。《そうするなら、せめて急がないように；自分の行動を朱培徳に合わせるように》、と彼は主張した。同時にКончицはブリュヘルに報告を送り、最後には自づから彼の所へ出かけた。だが、時すでに遅かった。第6軍は攻撃に移り、9月19日、南昌を占拠した。その後の経過について、彼は次のように報告している：《奇襲から立ち直った敵軍は鉄道線路に沿って、急速に次々と新たな部隊を投入し始め、大砲と機関銃の致命的な火力で疲れきった我が部隊に打撃を与えた(一方第6軍には砲兵が全くなかった)。第6軍は南昌を確保できず、重大な損害を蒙り撤退せざるを得なかった。第1師団が命令を実行しなかった為、多くの兵が傷ついた。師団は南昌駅を占拠する代りに、山越えて拉発駅に向かい、大きく迂回した。その際、兵力の半分以上を失った。

第3軍はこの時、南昌からわずか一日行程の所にい

たが、何らの援助もしなかった。朱培徳は敵軍が程潜にいかん打撃を与えるかを静観していた。無論、彼は第6軍を支援することができたにもかかわらずである。程潜の方もこのことを知っており、後にわかるように、朱培徳に対してやはり同じ事で報復している》。実際には、朱培徳は高安のはるか北東にあったが、第6軍が敗北した後、撤退し、高安からわずか15 kmの所に止まった。

何度も繰り返されたことであったが、またもや、昨日までの軍閥間の鋭い対立の方が国民革命軍全体の共通利害よりも一層強力であることが判明した。

第6軍は9月23日に撤退した。第17(顧問E.B. Телленко)、第19、第1師団はグループをつくって撤退した。程潜は自己の軍隊の残存部隊を方城にある上富に集結し、そこで2週間、部隊を再編成することを決定した。

ブリュヘルは東部戦線に急行し、9月30日、高安に到着した。彼は彼特有の洞察力で、即座に状況を判断し、重大な敗北から教訓を引き出した。彼は書いている：《程潜が南昌を攻撃した結果、我々は江西戦域で作戦中の7個師団のうち、3個師団の大部分を失った。この事は我々が江西戦線で完全な敗北を喫することにつながる可能性がある。我が軍が初めて受けた敗北の原因は数多くあるが、その中で最も重要なのは程潜と朱培徳が協力しなかったことである》。ブリュヘルはそれ以外の敗北の原因をも分析した。程潜は第19師団を指揮して南昌へ突入した後、鉄道の南部分を攻撃しなかった。王柏齡は自分の軍隊を投入し、南昌へ突入した。第1師団が南昌駅に対して攻撃を行った際、第17師団の支援を即座には得られなかった。第17師団は撤退の直前になってようやく戦線に加わった。それらに加えてブリュヘルは次の事も考えた。もし程潜が湖の西岸に居たならば、第3軍が到達するまで南昌を守ることができたであろう。《いかなる悪い事にも良い一面がある》という原則に留意して、ブリュヘルは次のことを指摘した。この戦闘がもたらした唯一の効用は南昌の監獄で疲労困憊していた二人のソ連パイロットの解放と、反動分子であり蒋介石の手先である王柏齡の死亡である。

ブリュヘルが高安に到着したのは孫伝芳が当地へ攻撃を行ったのと同じ時であった。第1師団に対して攻撃をしかけたのは4個混成旅団であった。この時、第3軍は積極的行動を開始した。10月1日、2日、萬寿宮地区で激烈な戦闘が起こり、その結果、孫軍は死者千名、

大砲 6 門、ライフル 2 千丁、迫撃砲、機関銃等を失った。

だが、朱培徳は敵軍の追撃を行う決心がつかなかった。何故なら、敵軍は鉄道を使って予備隊を追加投入してくる可能性があった。それ以外に、第 6 軍が南昌での裏切りの報復として、彼を支援しなかった。

9 月 30 日、武寧付近で、第 7 軍も勝利を得、敵の 1 個師団を潰滅させ、数千丁のライフルと 8 門の大砲を捕獲した。

江西省占領の作戦計画を立てるにあたって、ブリュヘルは国民革命軍の前に立ちはだかる巨大な困難さを冷静にはかった。彼は国民革命軍の武器の装備が孫伝芳軍のものより、はるかに劣っていることを確認した。国民革命軍の 1 個軍には当時、1 門か 2 門の大砲しかなかったのに対し、孫軍の 1 個師団は少なくとも 4 門の大砲を有していた。しかも、若干の旅団（人数では国民革命軍の師団にほぼ等しい）にも、大砲があった。孫軍は機関銃の点でも優位にあった。敵軍の火力は極めて正確であった。江西省には他省からやって来た大量の兵力が集結した。それ故、ブリュヘルが次のような結論を下したのはもっともであった：江西省を占拠しようとする戦いは孫伝芳の全兵力の撃滅を求める戦いへと転化した。

ブリュヘルは 9 月から 10 月にかけての戦闘経験を総括し、満足した様子で次のように述べた：《第 2、第 3、第 6 軍及び師団は統一的軍事行動をとることができた。だが、第 7 軍とはひどく連係が悪かったので、それは単独行動をとりがちであった》。国民革命軍の《戦闘中の行為は称賛し尽せないほどである》。ただ 17 師団のみが敵の火力に耐えられなかった。《我々の勝利はもっぱら、頑強な精神力、銃剣、或いは夜襲によって得られたものである》。

これは当然、多大の犠牲をともなった。高安の戦いで約 2 千名の死傷者がでた。ブリュヘルは次のように報告した：《我々は撤退中の敵軍をうまく撃滅することができない。その原因——我々の兵力は少なすぎて戦闘中に敵軍を包囲することができない。しかも、敵の撤退は夜間に、そしてばらばらに行なわれる（知らない土地で無数の曲りくねった水田の小道を通して、夜間追撃することは極めて困難である）その上、我が軍の師団長は大胆さに欠けている》。

ブリュヘルは南昌—九江間の鉄道に沿って攻撃に転ずるよう、全般的な指令を出した。但し、彼は国民革命軍が真剣に再編成する必要があることを強調した。

しかし、蒋介石はまたもや、干渉して事態を悪化させた。10 月 4 日、彼はブリュヘルを伴わず奉新の第 1 師団に出かけた。そしてそこで、翌日全面攻撃に出るよう指令を発した。第 7 軍は徳安を占拠し、第 6 軍は長埠街と涂家埠（敵はここをすばらしい防衛陣地に変えていた）を占拠することになった。第 3 軍は鉄道の南部分に進撃することになった。

ブリュヘルは蒋介石の計画を根拠ある理由で批判した：第 3 軍は 10 月 7 日以前には前進できなかった。一方、第 2 軍はこれよりもさらに一日遅れて南方から南昌へ到達する可能性があった。もし、こうした状況下で第 7 軍が徳安を攻撃したなら、敵軍は国民革命軍を次々と各個撃破することができたであろう。敵軍は迅速な機動作戦を行うための申し分のない手段——後方に鉄道を持っていた。ブリュヘルは報告した：《もし敵が鉄道をうまく利用したならば、この司令長官の愚行は我々の全面的敗北へと導く可能性がある。特に第 6 軍の状況は危険である。私は、各部隊の出撃の時間を合わせるために、あらゆる手段をとりつつある。だが、通信連絡がきわめて悪いので、あまり大きな希望は持てない。私は何とか作戦を一日だけ延期させることができた。これによって、各部隊が鉄道に接近する時間はある程度、同じになるであろう。私は全力を尽してこの作戦に勝利を収めるつもりである》。

残念なことに、ブリュヘルの心配は正しかった。第 7 軍は徳安に突入したが、そこで、機関銃や良く訓練された砲兵の、すさまじい火力を浴びて、2 日後には徳安を撤退し武寧地区へ向かわざるを得なかった。第 6 軍は隣りの軍の敗北を知らず、攻撃に転じ撃退された。第 3 軍は 10 月 10 日、楽化地区で攻撃をしかけたが失敗した。鉄道とすぐれた電信網によって、敵は容易に部隊を移動させることができた。国民革命軍は多大の損害を被り、鉄道線路から退却し、各軍団間の連絡は完全に断たれた。孫伝芳は第 7 軍を包囲しようとさえ企図した。10 月 6 日、彼は 5 個連隊に瑞昌で揚子江を越え、国民革命軍の後方に迂回させようとした。だが、10 月 12—13 日、第 7 軍はその連隊を撃退した。

国民革命軍は作戦に失敗したため、新しい兵力を集めることを考えねばならなかった。すでに述べたように、第 4 軍は大冶—陽新間で軍閥軍の諸部隊を一掃しなければならなかった。10 月 18 日、月末までに武寧に移動するようという、蒋介石の命令を受け取った。第 4 軍はそこで、李済深麾下の軍の北方グループの予備軍となることになっていた。唐生智を完全には信頼す

ることができなかった。第4軍の副軍長と師団長達は《保定派》の対抗者として、武漢に若干の部隊を残して置くことに決めた：葉挺の英雄的な鉄軍を含む予備連隊と、さらに2個大隊が残された。鉄軍の将校団は大損害を受けていた。

軍長陳可鈺は病気だった。陳銘樞が武漢の守備隊長になった。そこで張發奎が全体の指揮をとって、第12及び第10師団から4個連隊と1大隊が江西に向かった。ソ連の顧問 Палло がそれに付いていた。部隊は10月21日出撃した。だが、この時すでに敵軍は大冶から撤退していた。そこで、張發奎の進撃は第7軍の要請により速められた。

これもまた驚くにはあたらない——国民革命軍は増援部隊を大至急必要としていた。10月の戦闘で小隊長、中隊の70~80%、大隊長の50%近くを失った部隊もいくつかあった。雨と寒さが始まり、食料も弾薬も予備がなかった。

一方、ブリュヘルは国民革命軍の組織的団結のために、広汎な仕事をした。電信と、進んで革命軍に協力した農民の伝令の助けで、各軍の間の連絡及び、奉新にある司令部と各軍との連絡が確保された。10月10日武昌が陥落したこと、また呉佩孚の残存部隊(3個師団)が宜昌から一掃されたというニュースは国民革命軍を勇気づけた。

細かい点まで入念に作戦計画を仕上げた後、ブリュヘルは1926年10月28日、江西攻撃の指令を発した。その中に、偵察隊のデータに基づく、孫伝芳軍に関する極めて詳細な情報が含まれていた。

孫伝芳の戦力はこの時まで、いくつかのグループに分かれていた。南昌の南側に、戦闘力の貧弱な11,500の兵力の部隊が存在していた。樂化地区には13,000の兵力があったが、2個連隊が国民革命軍側に移ることに同意していた。塗家埠—徳安地区には孫伝芳の中央グループ13,000の兵力が集結しており、ここでは1個連隊が軍閥を裏切ろうとしていた。最後に、九江には55,000の兵力があり、その中の1個旅団が国民革命軍と連絡を保っていた。このように孫伝芳の全兵力は45,000と判断された。その中の約7,000は国民革命軍と協力する用意があった。

周鳳岐の浙江軍との交渉がもたれた。浙江軍は奉天派による江蘇省攻撃の実際の脅威に不安を感じていた。こういう次第で、ブリュヘルは敵軍の右翼を攻撃することは得策でないと考えた。何故ならば、自然の障害をのり越えることが困難であるのは無論のこと、

その上、この攻撃は浙江軍との不必要な争いを引き起こすであろうから。ブリュヘルは指令の中で、敵の立場の全般的な弱点を指摘した。敵のすぐ後方は河と湖で、それを渡る手段は殆ど無かった。

全面攻撃は11月2日に始まった。蒋介石は今や沈黙し、作戦指導すべてをブリュヘルに任せた。

国民革命軍の、南昌作戦に参加した主要な部隊の配置は次のようであった：第7軍、賀耀組の第2独立師団及び第4軍の第12師団—武寧、第6軍—安義、第1軍の第1、第2師団—奉新、第3軍—南昌の西方30kmの地点。

作戦計画は次のようであった：第7軍、第2独立師団及び第12師団は徳安——馬回嶺地区を攻撃すること。第7軍は北方から塗家埠を攻撃すること。以上は2万人の主力攻撃部隊であった。第6軍は樂化駅及び南側から塗家埠を攻撃した。第3軍は南昌駅を攻撃した。第1軍第1、第2師団は第6軍と第3軍の間にあり、予備隊となっていた。最後に、南から南昌へ進撃していたのは第2、第14軍で、その兵力総数は7,500であった。ブリュヘルは強調した：《精力的且つ迅速な実行がこの作戦の成功を保証する。そしてその実行に際しては、一日は無論のこと一時間でも無駄にしてはならない》。

ブリュヘルは南昌の防衛地帯の主要な要塞、塗家埠の占拠に決定的な意義を置いた：《我々が塗家埠地区を占拠することができるなら、敵の手から敵の支柱の中心を奪い、敵の全防衛戦線を壊滅させ、我々の部隊と河との間の袋状の地域に敵を追いやり、かくて、我が軍の精力的な活動を通じて敵軍の主力を完全に包囲し、全滅させ、孫伝芳の軍事力を完全に一掃することになる。その後は、九江を大した困難もなく占拠するであろう》。ブリュヘルはさらにもう一つ勝利の主要な条件を指摘した：《是が非でも鉄道線路に沿って、全軍による一斉同時攻撃を達成しなければならない》。

《軽率に》行われた10月の作戦とは異なり、今回は、作戦の準備に必要なことは可能な限り行われた。軍隊に暖かい制服が分配され、兵站組織及び野戦病院が創立され、各軍の間に定常的電信連絡が確立された(第7軍とは無線を使った)。指令は中国語に翻訳され、蒋介石は署名した。そのロシア語原文は同時に、顧問全員に送られた。

勿論、ブリュヘルがあらゆる点で用心したにも拘らず、指令を実行するにあたってすぐに勝手気ままな行為が始まった。ブリュヘルは第4軍のいくつかの部隊

を予備グループとして、残しておくことが必要だと考えた。第7軍軍長であり、同時に北方グループを指揮していた李宗仁は異なる考えを持っていた。彼にとって、作戦の成功は副次的なものであった。彼にとって最優先になるのは自分の個人的な部隊を温存することであった。それ故、彼は第4軍に徳安攻撃の主要な役割をあてた。第7軍と賀耀組の独立師団は単に自分の安全をはかり、《デモ行進を行おう》とするばかりであった。美辞麗句を使わないとすれば、結局の所、第4軍は第7軍のために敵を道から一掃することになった。第4軍は馬回嶺攻撃に際しても、決定権を持つはめになったが、これは第4軍の意図と一致していた。第4軍の司令部は湖南作戦の経験を積み、隣りの部隊が裏切るだろうとはほぼ確信し、そこで、あらゆる方面に強力なスパイを適時に送り出していた。事実、第7軍は遅れ、第2独立師団は戦闘の初日、《生きている気配を全く見せなかった》。

南昌作戦の際、ブリュヘルは蒋介石を伴い、自分達は第3、第6軍を求めて出発し、総司令部付きの顧問 Корнев は司令部に残しておいた。ブリュヘルは作戦が最終的には成功すると完全に確信していた。彼はまだ高安にいた時、顧問 Н.И. Коняичи に《11月5日に江西の問題は解決されるであろう》と述べた。だが、当時の中国の条件下における軍事行動の過程で、ブリュヘルが着手できる事はもう少なくなっていた。それ故にこそ、彼は作戦を開始する前に、連隊の将校達に作戦計画を知らせるよう要求した。

南昌作戦で、第2、第3、第6軍は80 km にわたる戦線において昼も夜も、血なまぐさい戦いを行った。11月1日、第6軍は鉄道線を遮断し、涂家埠にいる敵軍のグループを南昌から切り離した。第3軍は河の向こう岸にある南昌駅を何度も攻撃し、11月4日、飛行隊の支援を得て駅を占拠した。一方、第2軍は南と東から南昌に近付いた。

徳安と馬回嶺の戦いが11月2日と3日に繰り広げられた。その戦いで決定的な役割を果たしたのは第35、第36連隊であった。国民革命軍は全体で600名を失った。軍閥側から大量の戦利品を獲得した：1,000丁以上のライフル、大砲12門、重機関銃5丁、小型無線機。第2独立師団の師団長は激戦をうまく引き抜けて、ただちに九江に向かった。

涂家埠は11月5日強襲された：北から—第7軍、南から—第6軍。蒋介石の第1師団が敵の湖への退路

を断った。湖には船が集結していた。同じ日、3万に上る敵の包囲されたグループを一掃し、捕虜にし始めた。その後、涂家埠地区で1つの師団が丸ごと国民革命軍に移ってきた。ブリュヘルの予見は完全に現実のものとなった。まさに彼が予言した期限までに、孫伝芳の問題は解消した。

11月5日、南昌もまた完全に包囲された。蒋介石は包囲された敵軍とただちに交渉を始めた。白崇禧の師団が南昌へ増援された。彼は第7軍出身の広西軍閥で、蒋介石の参謀長になっていた。更に第6軍（顧問 E.B. Тесленко）第17師団も増援部隊に加わった。南昌は11月8日降伏した。

蒋介石は敗北した敵に対し、不誠実な態度をとった。彼は包囲した軍隊を国民革命軍に加えることを約束した。しかしその代りに、彼らを武装解除し、三人の將軍達を大衆の面前で恥をかかせるために、二昼夜にわたって柱に縛りつけた。そこは、蒋介石の住居になっていた省長公邸のそばであった。そのような無意味な残酷さは顧問達の抗議を招いた。

ブリュヘルは戦闘に関する報告書の中で次のように書いた：《孫伝芳軍及び本来の江西軍は11月5日、最終的な敗北を喫した。鉄道線路から湖の方へ撃退され、南北から包囲されて、敵軍の残存部隊は11月9日武装解除された。我々は約4万丁のライフル、数十門の大砲、多数の機関銃を手に入れた。敵は大量の武器を河に投げ捨てた》。

かつては大部隊であった孫伝芳軍のわずかな残存部隊だけが江西から逃れることができた。国民革命軍は九江—南昌地区で、4万人以上の兵員を捕虜にした。確かに、この勝利によって国民革命軍は中国の中の広大な地域を確保したが、それには大きな犠牲を伴った。江西で約15,000人が死傷し、一方、北伐の今までの損害は25,000人以上であった。江西での戦闘中、国民革命軍は信じ難い程数多くの型の武器を持っていたため、弾薬のひどい不足を経験した。それ故、白兵戦及び夜襲が重要視されるようになった。それは勿論、損害の増大さを伴った。

国民革命軍各部隊の勝利全体に対する貢献度はまちまちである。この一連の戦いの困難さを一手に引き受けたのは広東の主力軍であった。第7軍及び賀耀組の師団は戦闘で抜け目なく立ちまわり、破れた敵軍の逮捕の時のみ極めて活発で、戦利品の大きな部分を手中に収めた。